

エッセイ部門優秀作品

長崎県雲仙市 本田さま

「くまゼミのような博多」

今年の夏休み。私たち家族は、ちょうど博多の町を訪れていた。

小学校三年生になる息子が、学校の図書室で「博多の町」の内容が書かれてある本に巡りあったことが旅行のキッカケだった。息子の興味をそそったのは、独特の博多弁だった。本に書かれてある博多弁「シャーシー」の言葉の横に「うるさい せわしい」という意味がのっており、昆虫好きの息子は「シャーシー」という言葉は「くまゼミ」からきたのかも・・・と思ったという。鳴き声もそっくりで、うるささも天下一品だからだそう。そんな博多弁は、子供の想像も膨らませてくれる程、楽しいと感じる。

私たち家族は、博多に着くと「ふるさと館」という所を訪れた。そこには、昔から博多の町が栄えていた理由や、町の活気が力強く表現されていた。イヤホンから博多弁を聞くコーナーもあれば、まげを結ったカツラをかぶるコーナーもあり、子供たちはとても喜んでいて。又、二階には博多の商人たちが過ごした町の一角が模型という形で再現されていた。息子は、その場所でピタリと足を止め、一気に昔の博多の町へと吸い込まれていった。一つ一つを丁寧に観察し、ノートに細かく記述していた。品物の名が全て右から書かれてある事やキャンデーの「ヤ」の大文字で書かれてある事にも驚いていたが、何より大きなソロバンを持っている商人に町人が話しかけている姿などことごとく懐かしく感じる場面が気に入ったそう。息子は、商人たちの模型を見ながら「やっぱりくまゼミだ。くまゼミの羽みたい綺麗な町で元気な町だって思った」と言った。そこには、模型で作られた商いの様子だけが表現されていたがそこには一つ一つのものから伝わる博多の情熱があった。

ふるさと館をでると、私たちは博多の町を歩いた。しばらく歩いているとたくさんの屋台が並んでいる場所へとでた。まだ夕方なのに、たくさんのお客さんがいた。始めて見る屋台に息子が「お祭り」と聞くと、「博多ん町はいつでもお祭りたい」という言葉が返ってきて、私たちは屋台でラーメンをご馳走になった。お礼を言うと「お礼はよかと。恩返しはしたかとやったら、また博多に来んしゃい」と、皆さんが口々に言って下さった。

博多の町の姿は、時代と共に移り変わっていくが、私たち家族は、ふるさと館で見た、昔から変わらない人の温もりとユーモア溢れる語彙に、博多が栄えてやまない理由を知った。

ホテルに着くと、息子が「一体、さっきの人達って、どの人が屋台の主人だったの」と言った「ん？・・・」と、思いだしても楽しくなる博多の町だった。

博多にはそんなくまゼミのような町の美しさとうるさいほど人情味に溢れる人々が作りつづけてきた町だと思った。これから先の未来もかわらず他の町にはない独特な味をだしつづける博多があるだろう。